スキーと山

第三十五號

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十三年二月二十九日印刷納本

大正十三年三月一日發行（毎月一回一日發行）

札幌　スキーと山の會　發行

第三十五號目次

記事

冬の十勝岳（一）　板橋敬一（一）
直滑降に就いての一考察　廣田戸七郎（六）
北海道山岳會所屬シャンツェ設計報告　加納一郎（一五）
札幌中等學校スキー競技會スキージャンピング　北大スキー部（二〇）

圖版

直滑降　長谷川敦（九）
テレマーク　同（一三）

大正十三年三月發行

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

豐富な積雪!!

潤澤な斜面!!

充分の設備!!

五色温泉

山形縣南置賜郡上山村

板谷驛に下車

宗川旅館

遂に雪の時期が參りました。

スキーの御用意は是非當店へ

小樽市穂稲市通大町

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

サンドストラム會社

瑞典サンドストラム會社製

日本總代理店

スキーが新輸着致しました

同社製品は畏くも

秩父宮殿下

の御下命の榮を賜はりたる逸品にして又世界的山岳家として我國の權威たる

槇有恒氏

の御賞讃品にして又御愛用品でございます。

美津濃特製スキー……九圓ヨリ十七圓マデ

東洋最大　専門大商店

美津濃

工場大阪浦江町　卸部大阪淀屋橋

本店　大阪淀屋橋

大阪南支店　日本橋四

東京支店　神田小川町

神戸支店　三宮路切南

冬の十勝岳（一）

板橋敬一

時日　二三、一二、二七――一二、三一、
同行者　佐々木政吉、田口鎭雄、岩森秀夫、伊藤秀五郎

「そのね、フラウがスキーをやるんだつて。で、冬にも温泉を開いてゐるから是非やつて來て呉れと、そこの人達はみんなで云つてゐたよ」。

夏、十勝岳に登つた友達から、こうした山の中の温泉場のことを話されて以來、何だか雪が降つたらどうしても行つて見なければならないやうな氣がしてたまらなかつた。

それに、その年の二月だつた。蘆別岳に登らうとして札幌から乘り込んだ汽車が、空知川のあの獨歩が若い時移住しやうとして土地を求めに來た。狹い狹い谿谷をぬけ出して、午に近い頃富良野原野に喘ぎ喘ぎ入つて行くや、自分は氷つた窓硝子の彼方にくつきりと浮んだ十勝岳の美しい姿を、見逃すことなしに迎へ入れたのであつた。尖つた頂近くからは煙をふいてゐる。麓には蒼蒼と針をならべたやうに樹林がかこんでゐる。そして森林帶をぬけ出た眞白な山の膚、自分の心の中にはそこに燃え立つ噴煙とともに、ぐいぐいと細い竹の竿の端にでもつつたつたまゝ、蒼空の中に限りもなくさし上げられやうな、云ふに云はれない登りたいと云ふ氣分がこみ上つて來たのであつた。

その年も暮れやうとした頃、久し振りで學校を開放された。中央高地に向ふときには必ず乘る。札幌を夜の十二時近くに發つ淋しい夜汽車の片隅に五人のものは身を横へた。そして次の朝にはすでに汽車は旭川から釧路へと吹雪の中をひた走つてゐた。

山麓の上富良野の驛から四里のこころに例の吹上温泉がある。そして又そのそばに硫黄鑛山の事務所がある。でこゝまでは完全な馬橇道が美しい針葉樹帶を縫ふてゆるく登つてゐる。あたりの樹林の景觀の美と來ては今迄に殆んど經驗もしない位の美しさだ。その上道は女でも歩いて登つて行ける容易さだ。

その日の午過ぎ温泉に荷を下ろすや否や自分達は鑛山事務所に行つて明日登るべき山の方角を敎はり、そして日の暮れるまでラッセルをつゞけて來た。土地が高いだけに雪は無性によい。歸りは五人のものは有頂天になつて滑つた。たゞ雲が晴れない。この一週間あまり毎日シケてゐると鑛山の人々は降る雪を見つめて云つてゐた。

温泉には期待したスキーをやると云ふ奥樣もゐなかつた。そしてその主人もゐなかつた。たゞ留守番の人が一人ぽつねんとして山中に日を送つてゐるのみで、その他には猫が一匹と犬が二匹——その一つは生れて間もない仔犬——がわづかにうごめくものの一群であつたのだ。

飯を澤山炊いておいて呉れと頼んであつたので、五升だき位の大鍋にわんわんと云ふほど蒸れてゐた。それでも皆はどうにか味噌汁をすゝりすゝりその半分に近いまで平げた。えらい勢だ。

湯はその家から——實に立派な家だこんな山の中には勿体ない程のがんとした家だ——半町ばかり下の谿にある。提灯をつけて崖道を下りて行く。怪しげな影が谿の片側や、白く切り立つた崖にゆらゆらと氣味わるくゆらめく。針葉樹は一本一本提灯の光がとゞき出すと、しめし合はせたやうにニュ、ニュとあらはれて來る。凄い暗だ。提灯の照らす範圍だけが自分達の世界なのだ。こんでもないところからこんでもない恰好の岩や樹が想像を裏切つてあらはれ出す。ふいと大きなごうしてもよぢのぼれさうもない絶壁につきあたる。とそれが浴場なんだ。氷の張りつめた床の上で素早く衣服をぬいでいきなりとびこむ。ぬるい湯だ。湯槽の眞中に又仕切りがあつて湯は底の石の間から湧き出してゐる。いくらか温かい。透きとほつた湯の中にみにくく水ぶくれにでもなつたかのやうな足や手やそして胴が、不均整をあくまでも標榜してうごめいてゐる。時折谿底をゆする冷たい風が、浴場の隅々から忍び込んで來ては提灯を消さうとする。その度毎に蒼白い灯

はひととき燃えさかる。と、水ぶくれの人間の膚は水底死人のやうに一層蒼ざめがかつて浮び上つて行く。鏡花によつて印象づけられた北陸の雪に埋もれたさみしい山の中の温泉場と、そして亡靈との種々のシーンがゆくりなくもこうして居る間に湧き上つて來たのであつた。湯氣はボーと立ち騰つて冷たい風にあたつては消えて行く。湯の香はほんのりと肌にしみついてゐた。

「温泉もね、こうとう人手にわたつて了つたのですよ」。

留守番の中年の男は杯を口にしながら人懐つこく語り出した。

「私はまあ、この温泉の明け渡しの見張りと云つたやうなわけで、市街地の人から是非と頼まれて仕方なしにやつて來たんです。Nさんですか。あの人達はつい一昨日山を降りたばつかりなんですよ。隨分大袈裟な人達だつたものですから大荷物でしてね。それに私だつてこうした監督なんかによこされたと云つたつて、何から何まで執達吏見たやうに差押へることもできませんやね。隨分何の彼のと云つてもつて行つたやうですよ。」

話の際中から今日、麓を山に急ぐとき、家財道具をつんだ馬橇がチンチンと悲しい鈴の音を立てて幾臺も幾臺も下りて行くのに出逢つたことを思ひ出した。自分達はその時又移住者がやられたなと直覺的に感じたのであつた。そして厳冬になつてから農場を逐ひ立てられてあてどもなく流れて行く小作人の身の上をあはれんだのだ。それがこの温泉のNさんの荷物の殘りだつたらしい。五人は思ひ合はせたやうに顔を見合はせた。

「奥さんもね、女中達と一緒に泣くやうにして山を下りたんですよ。女だから餘計悲しかつたんでせうな。……温泉ですか、これは市街地の飛澤つて云ふ御醫者さんのものになつたんです。貸した金の抵當にこれが全部入つてゐたらしいんですね。ほんとにこんな惜しげもなく金をかけてつまらないことをしたもんですよ。正月にでもなれば早々御醫者さんでも人をあげると云つてるし、その中にや女中も來るし、温泉もどうやら……」

と、納屋との境の硝子戸がガラガラと開いて話はブツツリ途切れし了つた。ストーブをかこんでゐた人々は一齊にギクッとして眞暗な暗をみつめた。そこからは晝間見た犬がものうげに入つて來た。ランプの光は冷たい風をくらつてユラユラとうごいた。

「コラ、ベス、あつちへ行つてろ。」

中年の男は、いまいましさうに何時の間にか杯こもちかへた煙管をふり上げて怒鳴り出した。でも犬はさうすることが習慣ででもあるかのやうに、仔犬を口でくはへて床の上にのせ、そして自分も床に上り長いしなび切つた乳房をたれたまゝのそのそこストーブの隅のところに身を運んで來た。皆は默つてそれを見つめてゐた。男は

「出て行け、出て行け」

こしきりに叫んだ。そして自分も立ち上つて叮嚀に犬の開いた硝子戸をしめ終つてから、やけに犬を追ひやつた。犬は厭々の氣持一杯で土間に下り前足で巧みに戸を開いてから納屋に入つて行つた。男は犬のさうした藝を自分達に見せびらかしたことがさも得意でもあるかのやうな氣分で、力まかせに戸をたて切つてからストーブの傍にその赭ら顏をぬつとつき出した。

「いゝ犬だね。ポインターの雜種らしいね」

犬好きのIはそんなことを云つた。

「俺はあの仔がむつたり可愛いくてな。小さなまるまつた尻尾をチョロチョロと振るのがとてもたまらないよ。

Tは心から可笑しさうに笑ひ出した。

「あれであの親の方はすつかり弱つてゐてね、何やつても食べないんですよ。Nさんは一緒に連れて行くつもりだつたのだが、病氣なもんだから仕方なしに置いて行つたんですよ。あの親の方は一ぺんに十三匹も仔を生んだのでね。今殘つてゐるのはあれ一つきりだが、そんなことのためにめつきに弱つて了つたらしいのですね。」

「十三匹つて云ふのは珍らしいね。乳が足りないからそりや滿足には仔が育ちつこはないさ。良い種類のもの程育ちにくいんだからね。」

Iは又そんなことを云つた。

仔犬は納屋で悲しげに啼いてゐた。母親の懷にもぐりこむのだらう。藁をかきわける音がしきりにつゞいてゐた。

その夜自分達は屋根裏の火の氣もない、寒い室に冷たい重い蒲團をかけて凍てつくやうなまどろみをむさぼつた。

留守番の男は朝の二時頃から起き出して、谿底へ水を汲みに行つたり飯を炊いたりして呉れた。飯は硫黄くさい。朝五時、家を出る。眞先に山ランプをぶらさげてなだらかな坂を下り、鑛山事務所から昨日のスプールを專念に傳はる。雪は

シンシンと留度もなく降つてゐる。谿に架けられた棧橋を危ふげに渡る。棧と棧との間はところどころ雪が落ちてゐて、大きな穴の底からはるか下の谿の流れが見えてゐる。それからが白樺の純林なのだ。「ガンピハラ」と昨日鑛山の人達から教へられたところなのだ。朝の山は靜かだつた。雪のみが音なく降る。五人の滑る音は谿底を這ふやうにして上へ上へこの塊では無論ない。と云つて樹枝の交雜でも無論ない。乳色のそしてとり亂した夢の世界の純林に雪がやんはりとしなだれかゝつてゐるのだ。薄暗の中から白い、醒めやらない美しいものゝ影が、人の侵入によつて驚かされながらも、尙嬌態をつくつて、すうつと拔け出したまゝ迎へ入れる姿だ。黎明は明け放れやうとして、雪の中に尙ほ仄ぐらい影をたゞよはしてゐる。そこにこの白樺の森のみが白い輝かしさをたたへて笑つてゐる。たしかに笑つてゐるのだ。夏の朝だ。それは乳色の感じだ。襲ひ來る炎熱すらも思はせないすがすがしい乳色の感じだ。マロニエの樹が煙つてゐる。その下を山羊の乳賣る娘が可細い笛を吹いて夢のやうなアベニューをゆく。さうしたヨーロッパの美しい街の景色を想像したのかも知れない。

山ランプの灯がふつと消えた。谿底を這ふ風は白樺の森に愛くるしいさざめきとおののきこをあたへて行き過ぎた。薄明るくなつて行く。雪はそれでもしきりに降つてゐる。谿も漸く狹くなつて樹帶を離れやうとあがいてゐる。そして岩こ偃松とが雪こ氷とを被つてあらはれ出して來た。

細い谿を登り切るこ頂から走つて來る大きな斜面にとりつく。その兩側に同じやうな谷が窪んでゐる。始めに爆烈火口から出て來る左側の湯の澤をもこめて登つて行く。岩が美しく並列してその下からは張りつめた靑い氷が極はぎくあらはれてゐる。もれ上つた急斜面をたくみに横斷して左側の谿に一行は逃れて行つた。七時にもなつて未だ雪のためにあたりは薄暗い。それに風がない。時折岩塊の露出した裸のスロープが足下にゆるゆると展開する。霧がものうく動く。しかし間もなくすべてを被つて了ふ。急峻な、そして狹い谿をこまかいジッグザッグで飽くここもなく登つて行つた。ケーブルの大きな櫓が右側にあらはれ、谿の頭には鐵索小屋が雪と氷につゝまれて見えてゐる。そこに達するまでが容易でない。二時間餘りのうんざりする程のジッグザッグの後にやうやくたどりついた。小屋は氷にはりつめられてゐて近づけない。

（續く）

直滑降についての一考察

廣田戸七郎

足並の揃つた、相當スキーを穿き揑なせる自信のある連中が拾數名こつ〳〵斜面の麓を登つて行く。是からヴァージンスノウで、得意の直滑降をぶつ飛ばさうと云ふ意氣込みである。

リーダーらしい一人は、麓の方に一人殘つて、滑降して來る皆んなの滑降姿勢を見やうとして居る。

「さあ滑つたあ」。と下から怒鳴れば、木靈返しに「行くぞー」と上の方から聲がする。

一人が、頂上から痛快に一本ブッ飛ばした。

相當緩かな傾斜ではあるが、斜面の延長が可成り續いて居る故か、又ランナァ夫々の体質による爲め、安定ではあるが、仲々一樣に同じい滑降姿勢は見られない。

五、六本づゝ皆んなが、直滑降をぶつ飛ばしてから、麓の方に集つて、お互に燥いで居る。

「誰が何と云つても直滑降だけは止められない」とは一同の語り草である。

いろんなランナァの安定な直滑降を見るに、一樣に何れのランナァも、最初スキーを穿いた時に聞かされた直滑降の說明を、よく守つて直滑降を繰返して居ることを知る。夫は誠に結構なことである。而して夫は當然なことでもある。たゞその基本動作で習つたこと、聞かされたことにのみこらはれて、滑走を繰返して居ると云ふことが、何となく近頃の私に物足りない感じを抱かせるのである。

今私が是迄に直滑降のことで、讀み聞きしたことを一寸考へ出して見ると、大体次の樣なものになるやうである。

「斜面の頂に立つたなら、先づ兩足を揃へ、膝を離さぬやうにして、一方のスキーを他のスキーの一足長だけ前出し、後脚を膝の部分で少し屈ける。体重は後脚に託して前脚には、殆んど懸けてはならない」。

と云ふ說、この說の極端なものになると、强いて前に出した足を突張ることを敎へて居る。

更に次の樣な說明もある。

「直滑降姿勢では、一脚は他脚の前に二、三吋前出せしめ兩膝は出來るならば密着せしめて僅かに屈し、兩スキーを接近させて保ち、体重は後脚の足の甲の邊に落す」

この說では、可成り前說より合理的になつて來て居るやうであるが、尙後脚へ体重を多くかけることを說いて居るものと見ることが出來る。大体に於てこの說と似て居るが多少体重の關係を、明かに敎へて居るものは次の說である。

「直滑降姿勢では、兩脚を接して兩膝を多少屈曲させ、兩スキーを揃へ、体重は前脚と後脚に夫々三七、四六位の割合にかける」。

で是等の說の內で、スキーの初步から相當スキーを穿き揑なせるやうになるまで、何れが最も合理的で、又實際にやる上に支障が少いかと云ふことを考へて見ると、第三說ではなからうかと考へられる。

是等の說は、何れもスキー初步者の爲にスキー直滑降の基本動作の概念を、判り易く、そして簡單に解いて居るものと考へられる。

思ふに是迄の直滑降についての說は、直滑降そのものゝ說明として、說明の便宜上或は、解說通りでなく、多少酌酌せらるゝことがあるにせよ、夫は大部分初步者の爲に、都合よく說かるゝもので、スキーを相當穿き揑なせるやうになつたスキーランナァに對して、別に考慮されて酌酌せられたものでないやうに考へられる。

夫れ故スキーを相當穿き揑なすことの出來るやうになつたランナァに、醜い姿勢をよく見るやうである。是は要するに、實際スキーを穿き揑なすことの出來るランナァが、最初スキーを穿いた時に敎へられたことに、餘りとらはれ過ぎ、少しも自分の獨創的考へを挾むことがないからであらうと考へられるのである。

實際に於て、現在のスキーでは、敎へる人も、敎へらるゝ人も、夫れほど考へてスキーをやる必要がないものかも知れない。然し私には、それが何となく物足りなく感ぜらるゝのである。

已に直滑降のことについては、中野誠一氏が、「本誌第一年第四號」に於て、內外の一流スキーランナァの說く直滑

降説を掲げて、詳細に批評せられ、加之氏の卓論を述べて居らるゝ故、私は別に是からその同じ道をたどつて、直滑降説を論じたいと思はない。たゞ私は、スキーを相當穿き捏なせるやうになつたランナアが、安定な直滑降をする場合に、如何なる部分に自分の考へを置いて、滑つたらよからうかを考へて見るに過ぎない。

從來まで説かれて居る直滑降論では、何處を問題として説いてあるか、何處が直滑降の考への中心になつて居るかと云ふに、大体に於て、上体の問題は餘り深く考慮されずに、大部分腰から下の部分について、説かれて居ることを知るのである。

實際直滑降に於ては、上体の問題は「從」の問題であつて「主」の事柄は、腰から下にある故、斯く説かれて居ることは當然の事なのであつて、私自身も亦、直滑降に於ては、上体の問題より下体の問題が、最も重要な意義をもつものであることを認めるのである。

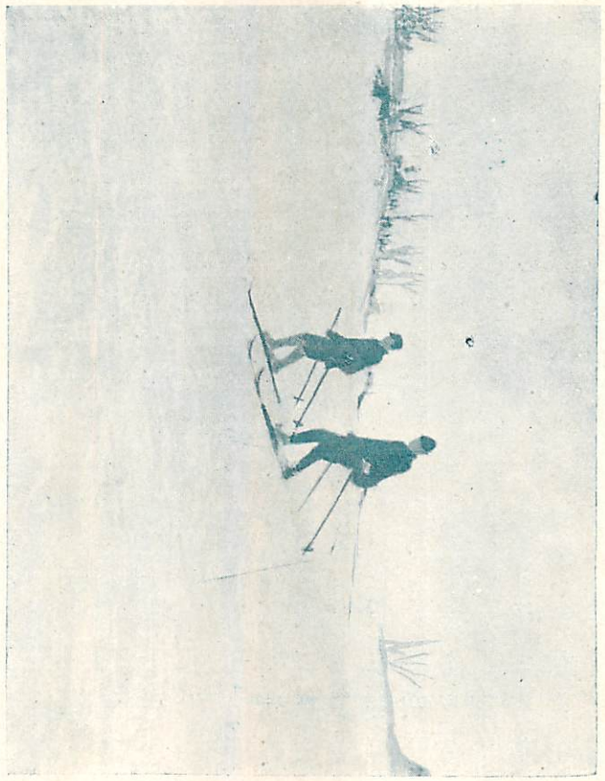
然らば直滑降に於て、下体の中、何れの部分が最も大切であり、深く考慮されねばならないかと云ふことを考へて見るに、是迄説かれて居る直滑降説を彼此參照して見ると直滑降の時に、最も重要視して考へられて居ることは、腰の姿勢でもなく、スキーが揃へらるゝことでもなく、足部のことでもなく、腰から足までの略々中間で、最も微妙な作用をなす「膝」であると考へられて居たやうである。

この膝を如何にするかと云ふことが、最も重大な問題で少くともこの問題の解決が、直滑降の生命の問題の樣に考へられて居たやうである。

而してその兩脚の兩膝の接着（又は密着とか、壓着とかと云ふ文字が用ひられて居る）が、必要であると説かれ、そこに如何にその兩膝を接すべきかゞ、二、三の説を生んで居ることを知るのである。

前述せる直滑降説と重複する感はあるが、或人は、前出し脚の膝を伸ばし後脚の膝を輕く屈し、兩膝を重ね合せ、後脚に体重の大部分を懸けるべしと説き、又或人は前脚を膝のところで多少屈して、後脚の膝を之に接着し、体重は三七、四六位の割合にして、前脚と後脚に分つやうに説きそして体の安定を保つべきことを述べて居る。

この兩説に於ては、何れも兩膝の接着から兩スキーを引き揃えて行くことを説いて居る。尚斜面とか雪質の事情によつて直滑降の姿勢も變らねばならないやうに説いてあるのが普通であるが、何時如何なる事情に説かれてある直滑降説も、一樣に兩膝は絶對に離れぬやうに接着せねばならぬことを説いて居る。



直滑降（長谷川　敬）

それほど兩膝の接着が重要なものであらうか、少くとも安定な直滑降をする爲には、是非とも兩膝の接着が第一條件として考へられねばならないか、どうかと云ふことが、私に近頃疑問を與へつゝある事柄である。

この兩膝を接着することは、本當のスキーの初心者に、スキー直滑降の本質を敎へ込む時に、說明の便宜上必要なことであつて、スキーを相當穿き揑なして、直滑降の可成り安定になつた人には、必ず兩膝を接着すると云ふことは不安なのではなからうかと考へられるのである。

つまりスキーを相當穿き揑なせる程度にまで進んだ人はほんやり基本動作にのみとらはれて居らずに、相當自分で考へて滑る必要があらうと考へるから、斯うした結論を生じた譯である。

已に私は兩膝の接着にとらはれずに、安定な直滑降をして居る連中を幾人も知つて居る。

又彎曲性の人で、膝の揃はぬ人の直滑降で安定なものを數多見て居る。

又スキーを相當に穿き揑なして居る人から、直滑降をいろ〳〵な事情の場合でやればやるほど、膝の接着問題よりももつと他の點に、直滑降の重要な意義があることを聞いて居る。

こんな事柄をいろ〳〵考へて見ると、實際スキーと云ふものを、相當穿き揑なせるやうになると、何だか直滑降の安定さと云ふものが、膝の接着に重大意義を置くものでないやうに考へられてならないのである。

自分自身でも、本當に安定に、相當な自信をもつて直滑降をやるときに、膝の接着にとらはれずに居ることが多い これはこの場合、兩膝を引つけやうとして接着して居るのではなく、自然的に引接せられて居るものかも知れない。

今安定な直滑降の場合を考へて見るに、大抵の場合安定な直滑降では、兩スキーが完全に平行に、殆んど兩者の間隔は三糎乃至は、一〇糎位の開きで雪面に水平に置かれて居るのを見るのである。そしてその條痕は、たしかに一條乃至は、相平行した直線の條痕で印せられて居るのである

即ち兩スキーの條痕が、平行せずに曲線をなして居ると云ふ場合は、殆んど見ないのである。若しも條痕に變化を來して居れば、必ずそこで体の安定さ、乃至はスキーの正しい位置が失はれて居るに相違ないのである。

尙又正しい安定な直滑降の條痕では（先づ私の今迄に有つ經驗と、實際に他の人の直滑降を目擊したところでは）後脚スキーのものが前脚スキーに比して、深く印せられて居ることを知るのである。而も是は當然なことであつて、

若しも前脚スキーの條痕が、後脚スキーの條痕よりも深く印せられて居る場合が、あつたとしたなら恐らく夫れは、ランナア自身意識的に前脚に体重をかけた爲に起つたことであらう。而してそんな場合の直滑降姿勢は、きつと安定ではあるまい。

勿論前脚に力を懸けると云ふことは、滑降姿勢の惡化に對して、反射的に、無意識的な動作によつて起る場合もあり、ランナア自身意識的にする場合もあらう。

何れにしても、自然に、無理のない直滑降中に、前脚スキーの條痕が、後脚スキー條痕よりも、雪中に深く印せられることは起らない筈である。

いろんな人の安定は直滑降の場合を見て、この兩スキーの條痕が全く平行であり、且一條になつて居ると云ふことそして水平に雪面に接觸して居るといふことについて、私は膝の接着以外にもつと重要な事柄が、何處かに存在して居るに相違ないと云ふことを知るのである。

前述せる如く、スプールが不正であるといふことは、滑降姿勢の動搖を明白に說いて居るものである。而してその姿勢の動搖は、ランナア自身之を招くこともあり、斜面の變化とか、雪質の變化とかと云つたやうな外部的事情の爲に起ることもあるが、大体に於てその動搖を前後の動搖と左右の動搖とに分つことが出來る。

而して体の動搖して居る時には、その影響は必ず膝に及び、更に膝の動搖は、スキーに及ぶことを知るのである。

スキーは、体の動搖乃至は、膝の動搖と共に左右に角付けされるか、前方に一方のスキーが浮き上るからであらう若しも兩脚を膝の部分で輕く屈接して居る爲に、この一方のスキーが浮き上ると云ふことがなければ、体全体のショックの爲に、前方に乘しかゝり易くなるからであらう。而もこの時輕く膝でショックを受け返して滑走を續け得るものとすれば、体の動搖は問題として考へる必要がないことになる。たゞスキーの角付けされると云ふことが滑走と轉倒との問題に大きい意義をもつことになる。こゝまでお讀みになつた方は、スキーの角付けされると云ふことは、何處に起因して、如何なる結果になるかを考へて戴きたい。

已に私は、直滑降に於ては、膝の接着は第一條件として必要缺くべからざることでないらしいといふ疑問の言葉を殘して來た。而してスプールの問題から膝の動搖は、スキースプールに可成りな影響を與へることについて、その結果を考へて見た。

斯うした事柄の結果から考へて、私はどうしても直滑降で考ふべき條件の内で、重要な事柄が膝より下方の足部に

あるものでなからうかと云ふ疑問を起したのである。

そんならその膝より下で、何處にスキーの動搖が起因して居るかを考へて、それは足首の締りではなからうかと云ふことを考へるに到つたのである。

足首の前後の屈伸動作は、たしかに膝の前後動作以前にスキーに影響することを知るのである。又、足首の左右動作と云ふことは、全く膝の動作と一緒に起るものであることを知るのである。そしてそれがスキーの角付けに影響するやうに考へられるのである。

即ち眞直ぐに滑降して、スキーに何等のショックも受けることのない場合には、兩足首を引寄せる（これは左右から引寄せる氣持の意で、前後に離れて居るものを引寄せる意ではない）樣な氣持で、スキーを揃へて滑降すれば安定なやうで、そこに直滑降の大切な中心があるやうに考へられたが、然し多少でも前後左右に膝が動搖して、同時に足首も同じく動いて、スキーの動搖が起り、中心が失はれて終ふやうに考へられて來たのである。

此處に於て私は、この足首を引寄せ、締めつけて居るやうにすると云ふ、即ち安定な直滑降で大切な中心として考へた足首の問題から、離れねばならなつたのである。

斯樣にして安定な直滑降に於て、最も重要な意義をもつ第一條件となる部分の考へが、次第に体の下方に進んで來て、結局足底作用の問題に歸着して、安定な直滑降の中心は、この部分にあるべきことを知つたのである。

兩膝揃へて滑降すること、雪面にスキーを水平に置れて滑降を持續すること、立派なスプールを印すること、凡べては、この足底がスキー上に正しい位置に置かるゝことによつて可能なることを知るのである。又同時に体の動搖、兩膝の動搖などは、足底の安定によつて、直ちに不正より正しい位置に直さるゝことをも考へらるゝのである。

實際に足底の働きは微妙であつて、体を正しい位置に据え、兩膝を輕く接着して置いても、足底の作用一つで、スキーを如何樣にも正しい位置より、不正な位置に、不安定な滑降から、安定な滑降に齎らすことが出來ると思ふのである。

夫れ故安定な直滑降論と云ふものも、結局この足底に如何に体重を載せ、如何に足底を働かすかと云ふことによつて、從來までのいろ〳〵な直滑降說を考へて見ると、容易に、その何れが合理的であらうかと云ふことも判ると思ふのである。

滑降中体の動搖を受けた時、兩膝を樂に働かせて、不安定な姿勢を安定な姿勢にすることは、是非とも必要である然し膝の輕い動作は、要するに体の動搖に對して起るべき性質をもつもので、必ずしもスキーを正しい位置に雪面に

テレマーク（長谷川　敦）

置く爲に起るべきものでないと思ふのである。スキーを正しい位置に据え、滑降の姿勢を安定にする爲には、是非とも足底の作用に俟たねばなるまいと考へるのである。

で私は、安定な直滑降の姿勢といふ問題を論ずる時に、この足底の事柄を第一に考へて、こるべき手段、選ばるべき方法が考慮されねばなるまいと思ふのである。

夫れ故この考へをもつて直滑降の問題を考へて見るこき膝の接着とか、腰の位置とか、体の姿勢こか云ふ事柄は、凡べてこの足底が滑降に當つて安定な位置をとるやうに、各ランナア夫々によつて、最も樂に、そして自然に作り出さるゝことが至當こ考へるのである。

然し姿勢の美醜こかこ云ふ考へからする時、決して安定であるからとて、餘り兩膝の開いて居る滑降姿勢や、一方の足だけ突き出して腰を下ろし過ぎたやうな滑降姿勢には感心することが出來ない。

私は自分のこの說を中野氏の卓越せる直滑降論に結びつけて考へて、氏の說かるゝ直滑降の基本動作に贊成する次第である。

最後に附言しく置きたいここは、私の此處まで述べて來たこの考へ方は、ひよつこすると、スキー初心者への直滑降說明に、初心者に誤解されやせぬかと云ふ懸念をもつて居る故、少くとも斯うした考へは、スキーを相當穿き揑なせる人に考へて頂きたいこ思ふのである。

この足底の作用こスキーの動作のここを考へて見るこ何こなくいろ〳〵なスウイングなぞにも、可成りこの考へが押し廣められて行くやうに思はれる。

スウイングや、他のテクニックの說明に、この足底の考へを多少入れて述べてあるものもあるが、もつと將來に於て、少くとも相當スキーを穿き揑なせる程度のランナアにいろ〳〵なスキーテクニックのボディスウイングを知ると同時に、スキーの動作に關係をもつことの多い足底の微妙な作用を可成り重要視して、滑られんことを希望する次第である。

（一九二四、一、九）

□スキー片々□

シュトックを握る方法は唯一つて澤山だ。手の甲を外にして母指が前方に來る極めて自然的な握り方て澤山である。そして之が一番自由が鋭く、杖の頭を握るのならかまわない。許しても良い。ラケットを握る樣な調子て杖を握つて何の役に立つ。雪輪が早く捐む外とりどころは無い、第一氣障だ。そしてころんだ時の無態つたら無い。それに危險が多い。やつて居る本人は得意がつてるからお芽出度いものだ。其の考は一寸伊達つてる心計らしい。氣障と伊達とはスキーには御免こうむり度いものだ。

北海道山岳會所屬シャンツエ設計報告

加納一郎

前言

北海道山岳會が札幌近郊に於て固定シャンツエを建造せんとし、之が選定設計を依囑せられたるにより、九月初旬先づその適地の踏査をなし、札幌市西北郊三角山山麓を選び、シャンツエ築造に最適の位置を得、その設計の大要を報告せり。こえて十月下旬右豫定地に高低測量を行ひ、精細なる設計を作成し、十一月下旬愈工事に着手し、十二月下旬竣功を見るに到れり。而して此のシャンツエは先づ一月二七日北海道帝國大學スキー部主催一九二四年札幌中等學校スキー競技會に用ひられ、二月二日北海道山岳會主催一九二四年北海道スキー選手權大會のジャムプ競技に使用せられたり。今その設計の大要に就て報告し、今後シャンツエ築造を行はるゝ場合の參考に資しせられたし。

位置の選定

大体の位置を三角山附近となせしは、同地域に既に北大ジルバーシャンツエあり、且つ附近の地形、緩急多樣の斜面に豐富にして、長短いづれの滑走にも充分の價値を有しその面積また廣大にして、札幌市郊外スキー地こして將來最も有望なりと認めたるによる。札幌近傍スキー地として從來最も多くのスキーランナアの集れるは圓山西南方の斜面なりしが、同地域に於ては滑走斜面多くは南方に面し且つ、尾根の派出尠からざる爲め、多數スキーランナアを一區域に集合せしむること困難にして、尙實際上、シャンツ

ヱ建造に當り、その適地が農耕地に該當する等の理由よりして、同方面を放棄したるものなり。而して、三角山方面に於ては、圓山方面に比し從來交通の便稍劣りしと雖も、現今電車の延長と、將來郊外電車の發達とを豫期し、反面に於て、尙多數スキーランナァの往復により適當なる交通機關の便を見るに到るべきを想到せり。

而して同方面に於ける適當なる斜面につきては、以前北大所屬シャンツヱの築造に當り、踏査したることあり、判定に多大の便宜を得たり。選定せる箇所は略北方に面する三角山東南方に派出せる尾根鞍部小丘上なるが、その原狀斜面はジャムピングヒルの理想斜面と比較考慮し、加工上最も經濟的なる事を推定せり。本位置につき缺點とすべきはその方位、北に面するは、日照の關係上理想的なるも、風向上、常に冬期當地方の常風たる西北風を受くること多きにあり。されど這般の關係は將來、森林の成立により避け得べく、尙築造後大なる障害を生ずるに於ては人工的に之を防ぎ得べき方法を有したるにより之を看過せり。更に第二の重要なる缺點は、その斜面の距離全く充分なりと云ふを得ず。實測の結果約八〇米にすぎざることを知れり。而れども本來、之が選定、設計の方針は、必ずしも優秀なる記錄を得んとするものにあらずして、未だ一般に公開せらるゝ固定シャンツヱの一も存せざるに鑑み、北海道スキーランナァの爲に、適當なる設備を有するスキージャムピングヒルを築造し、スキー術最高の技の發達と普及とに資せんとするに在りたるを以て、叙上の點また之を止むを得ずとなしたり。

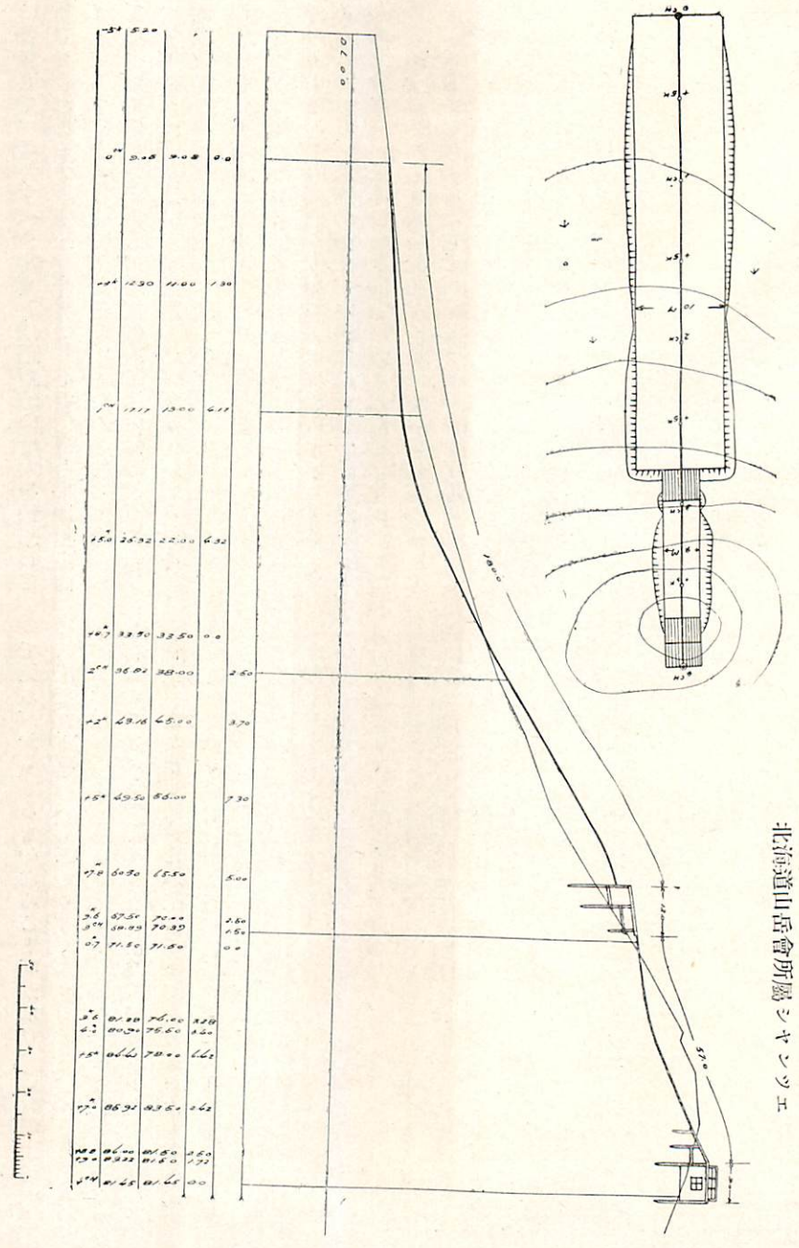
地質は礫質壤土、地被物は小笹密生し、灌木散生せり。加工に際し丘頂附近に於て稍堅硬なる地層に當れり。

測量の方法

上述の如くして大体右丘陵北方斜面に位置を確定して、地形測量をなしたり。測量の方法はトランシットによる水平測量にして、豫定線として、一線を測量せるのみ。初め丘頂より北西北、北、北東北の三線を測量するの豫定なりしも第一及び第二豫定線は目測により、いづれも傾斜緩にして、圏外の廣さ又充分ならざりしにより之を中止せり。

設計

かくて此が設計をなすに先立ち、思ふに同地域は北方、約一キロメートルの地點に於て北大ジルバーシャンツヱあり（該シャンツヱはほゞ東方に面し、本シャンツヱと、丁字形の位置をとれり）本シャンツヱと共に三角山スキー地の中心をなすべきものにして、ジルバーシャンツヱが、クロステルのセルフランガーシャンツヱと相同型にして將來



北海道山岳會所屬シャンツヱ

に着眼して、發達すべき技術と飛躍距離の增大を豫想して施工せられあるの關係上、今日の初心者に對しては稍高尙に過ぐるの觀あるを以て、此處に建造せんとするものに就ては、如上の點を考慮し、斜面の加工は大体、ダボスのジャムピングヒルに則り、着陸斜面の傾斜度の變移に細心の注意を拂ひ、特にシャンツエ即下のプロフィルは出來得る限り緩舒ならしめんとせり。

此が爲にアプローチは全部切土とし、ランディング斜面の上部は盛土、下方圈外に達するまで全て切土をなすの要あるに到れり。前述の如く、本斜面はその距離に於て必ずしも充分なりと云ふことを得ず、而も此に對し、ダボス型の加工をなさんとするを以て、シャンツエの位置を確定するにつき多大の苦心をなし、單にテクニック上必要なる諸要件のみより、之を定むることを得ず。經費の制限を受くるにより土木立坪の改算をなせしこと一再ならず。事情かくの如くなるを以て、設計は第一期工事のみにとゞめ、二三不充分なる點を殘し、今シーズンの成績をも考慮し將來逐次之が完成を期することゝせり。

けだし、經費充分にして當初より理想的加工をなすこと雖も、實際上生ずる各種微細なる原因よりする支障は積雪期に入りて得る經驗に徵して之を後年に改修補工せざるべからざることは、今日シャンツエ建造の經驗淺き吾人にとりて免るべからざるものなること明かなり。此れ如上の處置に出でたる理由の第二なり。

尙本設計に當り特に注目すべきはその出發點の加工なり右はアップローチ斜面の端が丘頂に達し尙不十分なりし關係上、之が補足の爲に木工スライドを建造せんと考へたりしも、地形の關係上、並びに經費の點に於て他に休憩所を作工するの餘裕なかりしを以てスライドの下方を利用せんとし、此處に休憩所と格納庫とを兼ねたる小舍を附屬せしむることゝなしたるなり。

工事の施行

設計成りて所要經費確定し工事に着手せしは既に初雪を過ぎたる後なりき。而して工事中途にして、しばしば降雪を見、進行上多少障害を來せりと雖も、今シーズンは例年に比し降雪度數及び積雪量甚だ少く、却つて此の工事の施工に便宜を得たり。

工事施行は先年北大ジルバーシャンツエ築造の經驗ある勞働者を使用したりしが、アプローチ及びランディング斜面の角度の變移につきては再三、再四檢討修覆を繰返し、理想線に近からしめんと努力せり。アップローチ斜面の巾は五メートルの豫定なりしも、ランデング斜面上部の盛土の必要なる關係上、丘陵兩側に切殘さるべき土積をも切取

ることゝなし、却つて竣成後利する所ありたり。

たゞ出發點木工と土工斜面との連接につきては甚だ困難を感じ、現場に於て當初の設計を多少變更して、可成的圓滑ならしめたり。

成績

積雪一般に甚だ遲く、スキー練習上多大の不幸を感じたるも、本シャンツエ竣功工幾何もならずして、本シャンツエを利用しジャムピングの練習をなすもの相つぐの狀況にして、積雪の整理、補正をなすの暇なかりしが、今日迄の經過に於て之が成績を斷ずるは尙積雪の不充分なるの點よりして早計に失するものなりと雖も、大体その成果を報ずるに、アップローチ斜面の距離に不足を感ずることを以て最も著しき事情とす。斜面角度の推移狀況につきては、未だ何等の不都合を發見せず。概して甚だ飛び易きシャンツエなりとして、多數のジャムパアを輩出しつゝある狀況なり。本項につきては本シーズンの全期經過を觀察し、將來加工補正するの要ある諸點を定めんとす。

後言

別掲平面圖並びに縱斷面圖は第一期工事によりて成れる現狀なり。本シャンツエは之を以て完成せられたりとなすに非ず。將來更にその缺點を補整し漸次完成の域に達せんとするものなることを忘るべからず。

之が築設に當り、位置の選定及び斜面の加工設計に關しては畏友廣田戸七郎君に負ふ所多し。又、測量、設計、製圖の細目につきては札幌土木事務所大原氏に、工事監督及び設計變更に關しては大塚要氏の勞によれり。記して以て感謝の意を表する次第でなり。

□スキー片々□

種々のスキー締具が續々と工案される。何れも似たりよつたりである。特にオーソリタチブでない限誰式スキー等と憶面もなく名稱する事は止めにしたい。ツダルスキーの發明したスキーにツダルスキー式と銘うたずに、自分の故郷の名前をつけた等は實際美しい感じがする。增してリリエンフエルト等と云ふ名は良い感じがする。頭がアルパイン式で尻がウイットフエルト式の折衷を何某式等と云ふのは感心せない。變な例をとるが化學分析等で Modification と云ふ字を使ふが今日本で工夫せられてる總てのスキーは皆其の類である。

札樽中等學校スキー競技會
スキージャムピング

1924 Jan. 27th

北大スキー部

當部主催の札樽中等學校スキー競技會も、その第一回札樽間驛傳競走を振り出しに、此處に回を重ぬること五回、漸く今年スキージャムピングのみの競技會が生るゝことゝなつた。

從來までは主としてクロスカントリーリレーとも見るべきものが、その競技種目に選ばれて居つたが、スキー界の趨勢は遂にスキージャムピングの必要を迫つた。スキー競技と云ふものゝ一方の立場から見た時、スキージャムピングは、たしかにスキー競技の最高なものゝ見ることが出來る。

一月二七日(日) 天候は申分なく、珍らしいほど晴れて氣持のよい日であつた。何しろスキージャムピングのみのスキー競技會が始めて行はれる日である故か、觀衆もジャムピングヒルに、早くから集ひ來つた。

部の都合により、部所屬のジルバアシャンツエで、今月の競技會を行ふことが出來ず、甚だ遺憾ではあつたが、幸ひにして北海道山岳會の新設ジャムピングヒルを、借用することが出來、此處に今年の競技會を開催することになつたことは、誠に喜ばしいことであつた。

ジャムピングヒルは、アプローチ約廿三米、ランディンググラウンド約廿五米、アウトラン二〇米程で、斜面は已に前日修理を終へて居たので、程よく固められて居た。

今度のこの大會は、日本スキー界での最初の擧行でもあり、且つ一週間後に行はるゝ北海道豫選の小手調べとも云つべき意義をもつものであるだけに、なか〳〵緊張して居つた參加學校は、札幌、小樽兩市に存在する中等學校の内、札幌の札幌商業を除いて、合計拾校であつた。

各參加學校のジャムパアは、何れも未だジャムプ修得年數が二ヶ年足らずである點からしても、何れが優勝するとも豫想さへつけることは出來なかつた。

開會前漸時各ジャムパアに練習時間を與へて、午前十時半全く、諸般の準備整へ、愈々競技開始となつ。

審判法は凡べて當部制定の、ジャムピング競技規定と、今度この競技會の爲に、特に制定せられた規約により行はれた。

競技規定は已に本誌第三二號に發表せられたところなれば、此處に省略することとし、規約の大略を記せば次の如きものである。

一九二四年札樽中等學校スキー競技會規約 (抜萃)

三、參加者資格。指定の申込を終りたる札樽中等學校在籍の學生たる事。

四、競技規定。當部制定(一九二三)のものに依る。

五、參加者人數。一校三名として補缺を設くるも差支なし

七、競技不能の場合は得點を與へられざるものとす。

一〇、優勝校決定方法。一校參加者の競技決定成績點の總和を以て該校の得點となし、その最高なるものを以て優勝校となす。但し同點の場合には同點校の中最長不倒ジャムパアの所屬校を以て優勝校となす。

一一、個人入賞規定。

A、決定成績點の最高なるものを以て優勝者となす

B、當日の最長不倒ジャムパアを以て、レコードホールダーとなす。

競技の結果各校得點數は次ぎの如くであつた。

小樽中學	一九三、三五
札幌師範	一六七、〇一
北海商業	一六四、三九
小樽商業	一四五、四〇
北海中學	一三五、二二
小樽水産	一三一、五二
札幌鐵道教習所	一三一、五二
札幌第一中	九九、〇七
札幌第二中	六四、二〇
札幌工業	一六、〇九

以上各校の得點は、別に定むる當部ジャムプ競技審判表の採點樣式より求め出されたものである。この結果により最高點を得たる小樽中學校が、優勝することゝなつた。

尙次の如き表により、各回の各校の不倒ジャムプパーセント、平均ジャムプ距離、ジャムプ及びスキー修得年數を知ることが出來る。

1924.27/1	不倒ジャムプ(%)			飛躍平均距離(m)			修得年數	
參加校	第一回目	第二回目	第三回目	第一回目	第二回目	第三回目	平均ジャムプ	スキー
小樽中學	16.59	17.01	20.92	10.9	10.33	11	1.7	4
小樽商業	15.16	5.55	13.21	10.7	3.8	7	1	3.3

小樽水産	13.80	10.80	6.37	9.86	7.13	3.5	2	3		
北海商業	12.53	11.86	19.39	7.93	7.66	11	1	2.7		
札幌一中	10.32	5.46	5.76	7.1	3.46	3.36	1	3		
札幌二中	4.65	4.91	……	3.1	3.2	……	1.6	3		
札幌師範	14.94	16.31	12.49	10.63	10.66	7.13	1	3		
札幌工業	……	……	……	……	……	……	1.4	2		
北海中學	4.63	16.35	13.93	3.4	7.16	7.7	1.3	3		
札幌鐵道教習所	9.70	11.48	13.63	7.23	6.96	7.3	1	2		
總平均	10.23	9.97	10.57	7.07	6.93	5.8	1.3	2.9		

表中……は一校選出三名選手が全部轉倒せることを示すものなり。

	天候	斜面の狀況	最長不倒距離(m)	レコードホルダー
1924	晴天	良好	12.8	秋野武夫(樺中)

個人優勝者として、小樽中學秋野武夫君は、不倒ジャムプ得點一三七、五四を得、且つジャムプ距離のみの最高レコードとして、一二、八〇米を飛び、不倒ジャムプ距離レコードの權威を獲たり。

次にジャムプテクニック方面の立場より、本大會を評せんに、審査と云ふものが、單に距離のみによつて行はるゝものでなく、距離ニスタイルと合せ採點せらるゝ點より考へて、兎に角確實に立派なフォームで飛んで、轉倒せないと云ふことが、最大要件である。而してそれが一校選出の三名のジャムパアが一樣に之を守つて、飛ぶことが必要なことであつた。この點より考へると、各校とも大体に於て確實で而も立派なジャムプをする樣に策戰して居つたやうであつた。

而してジャムプ滑走の姿勢を見ると、大体フォームは呑み込まれて居たやうであつた。數人の人を除いて大部分の人は、まづジャムプ滑走姿勢の要領を呑み込んで居たやうであつた。

最も姿勢及び動作ニして、物足りなく感ぜられた點は、サッツの動作と、ランディング姿勢の不完全と云ふことであつた。是等の不完全であつたと云ふことは、ジャムプの練習、研究日數の少かつたニ云ふことに、その大部分が起因して居つたことは、勿論云ふまでもないことであるが、アプローチが短かつた事も一つの原因である。

サッツの動作について考へて見るに、各校のジャムパアが、何れも確實に轉倒せずに滑走して行くと云ふ策戰をとつた爲か、サッツの動作の遲過ぎるものよりも、早過ぎたものが九分通り見受けられた。

本當に立派なサッツを見せたのは、樺中秋野君が、レコ

ード決勝をした際に行つた場合のみであつたやうである。中にはサッツを有効にせんとして、サッツの動作の前に兩手を後方に引いて、反動的に腕を前方に突き出して居た人も見受けたが、案外効果がなかつたやうである。

是はこの動作をとるべき瞬間を、正確に捕へ得なかつた爲ニ思ふ。一体この兩腕の反動的動作は、慥かに有効なものゝやうに考へられるが、その動作に移るべき瞬間を、正しく、確實につかむことが出來ねば、何等効果のないものであるから、この點については、尙一層研究する餘地があるやうに考へられた。

尙甚だしいものでは、クローチングダウンの姿勢も殆んどこらずに、直滑降ともクローチングダウンの姿勢とも、見分けのつかぬ姿勢で、アプローチの滑走をして、そのまゝフライトに出たやうな人も、見受けたが之はスタイル審査の立場から見て、餘り感心することは出來ない。

更に本大會のスタイル審査よりして、各ジャムパアに一樣に大きな缺陷があつた。夫れはランディング姿勢であるジャムピングヒルが、全体的に小規模なものであつたので全く立派な着陸姿勢に移らなくとも、轉倒せずに樂に滑走することが、出來た爲であつたニ考へるか、さもなくばランディング姿勢の研究が、未だ不充分で殆んど今度の參加者に考慮されなかつた爲かも知れない。

大部分の今度の大會參加者は、殆んど棒立ちのまゝの姿勢で、轉倒することがなかつたことは事實であつた。夫れが爲に棒立ち姿勢でも、大丈夫立てるものであり、宜しいと考へる人が、若しもあるニするなら、私はその考への誤つて居ることを指摘したい。

何故ニ云ふに、若しもかうした考へをもつ人があつたとしたなら、試みに今度の大會のジャムピングヒルよりも、もつと規模の大きいそして二〇米も三〇米も飛ぶやうなジャムプを見るがよい。さうしたらきつと棒立ちランディング姿勢の不合理であり、且つ不安定なことが、直ちに判るであらう。この二つの姿勢が、餘り良くなかつた爲に、不倒者のスタイルの大部分は、B、C、階級であつた。

ジャンプ滑走の諸動作の中で、完成の至難と考へるべき如上の二つの姿勢の研究を今後一層望む次第である。

最後に本大會の全体としての成績から云ふと、第一回の試みニして、非常に好成績であつたことは、次の如き不倒ニ轉倒の割合から見ても明かなことである。

各競技者三回宛のジャムプに於て、三回共不倒であつた人が拾名、二回共不倒であつた人が九名、一回の不倒者が五名、三回共轉倒した人が六名であつた。

（一九二四、二、六、文責、廣田）

彙報抄錄

オ・ケ兩大學スキーレース

British ski yearbook Vol. II No. I

オツクスフオードとケムブリツジ大學の對抗スキー競技は開始以來今シーズンで第三回目であるが、それは一九二三年一二月二九日スウイスのミユレンで開催された筈である。此の前の即ち第二回の競技は一九二三年一月一日ウエンゲンで行はれた。その狀況はラウテルブルンネンからインナー・ウエンゲンの上方に達するコースで一哩の平地滑走と二〇〇呎の登行、三〇〇〇呎の滑降よりなり立つてゐた。競技は見通しのきかぬ吹雪と霧とのうちにスタートを切られ出場者は各地點に立つてゐる多くのスキーランナーにたよらねばならなかつたが、こうした困難のうちに於て一三點對二三點でオツクスフオードが勝つた。競技は兩者一〇名宛の選手を以て行はれたので、オツクスフオードのアームストロング氏は開始後間もなく中止した。初めはカーレトン氏（オ）が先頭を切つてゐたが、ウエンゲン鐵道附近に於てクラーヴエネス氏（オ）が拔き、最後までリードし一四分四五秒と云ふ優秀なレコードを作つた。第二着はカーレトン氏でその次はケムブリツヂのキヤプテンであるドツグス氏がオツクスフオードのスタング氏（ノルウエー人）と僅かの差で入つた。

クラーヴエネス氏は引つゞいて二回も優勝したのであつてその勇氣と、ジヤムプのスタイルとに於てスウイス人に深き感銘を與へた。カーレトン氏はアメリカ人で東アメリカの選手權を持つてゐて、同時にまた立派なジヤムパアーである。（加納一郎）

英國スキー撰手權大會

British ski yearbook Vol. II No. I

英國スキー選手權大會は一九二四年一月三日より八日にわたりスウイスのアーデルボーデンに於て開かれることになつてゐる。第一日はスラロームレース、第二日は幼年及び婦人レース、第三日はクロス、カンツリー選手權競走、第四日はジヤムピング（セニアー及びジユニアー）第五日はハンディキヤツプレースである。

其他一月と二月とにはスウイスの、ミユレン、モルギンス、ポントレシナ、グリンデルヴアルド、グスタード等に於て、多くのチヤレンジ、カツプのスキー競技の開催日が定められてゐる。（加納一郎）